

## おわりに

本報告書は、平成 18 年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム「地元住民と共に学び共に創る健康生活」の 3 年間の軌跡と成果をとりまとめたものです。

本取り組みの中心課題は、平成 18 年度からスタートした新カリキュラムが目指した、地域住民の健康生活を支援する学生の実践能力の育成にありました。近年、文部科学省や厚生労働省から矢継ぎ早に発表されてきた看護学教育に関する報告書においては、一貫して看護実践能力の向上が強調されています。本取り組みは、こうした時代の要請を先取りし、施設内から地域へ、疾病・障害の治療から予防・健康増進へという現在、そして将来に向けた看護職者の役割拡大を視野に入れ実施してきたものだと自負しております。

加えて本取り組みにおいては、現代 GP として採択される以前から、教員それぞれが精力的に実施してきた、行政との協働による「西区ヘルスアップ作戦」や看護協会との連携による「神戸市看護大学まちな保健室」、近隣の学校との連携による「命の感動体験」「ピアカウンセリング」等の地域活動が基盤になりました。こうした平素からの地道な活動があったからこそ現代 GP の採択に結びつき、採択を機に全学一丸となって、さらなる展開を図ることができたのだといえます。

本取り組みの主軸である「地元住民と共に学び共に創る健康生活」という目標については、最終年度の第三者評価会議で高い評価をいただいたように、教育ボランティアをはじめとする地元住民のみなさまの積極的な参加を得て、十分に達成できたといえると思います。地元住民のみなさまが大学の演習や授業に参加していただき、健康生活支援学実習においては、学生が居宅を訪問させていただきました。こうした行き来を通して、新しい学びの場や機会が創出され、学生自身がコミュニケーション能力を高め、専門職としての責務を自覚することができました。そして、住民のみなさまが、ご自身の健康について考える機会にもなりました。そのような学びにおける「協働」が、本取り組みの中で実現しました。

看護学教育においては、他者との関係の中でコミュニケーション能力や援助能力を発達させることが不可欠ですが、核家族化が進み、地域での人間関係形成や異世代交流の機会が少なくなりつつある現代社会において、大学のこうした取り組みがますます必要になっていることを、われわれ教員としても改めて実感することができました。

他方、教育ボランティアの活動にとどまらず、「ヘルスアップ作戦」や「まちな保健室」を通して、地元住民のみなさまが本学に足を運ばれる機会が増え、「この大学が地元であってよかった」と愛着を感じてくださったことは、今後引き継ぐことのできる本学の大きな力ともなりました。

最終的に、学生自身の評価では、GP 活動が自身の学習に効果があったと回答した学生が半数を超えました。ただし、各事業、特にボランティア活動への学生の参加度や参加機会の保障については、今後課題も残しております。たださえ過密な看護学教育のカリキュラムや時間割の中で、どのようにこうした学習の場を保障していくかについては、外部

評価委員の先生からいただいたご提案なども踏まえ、今後もさまざまな工夫をしてみたいと思います。同様に、ただでさえ過密スケジュールにある教員が、いかに疲弊せず、生き生きとこの取り組みを継続していけるかについても課題は多々残ります。けれども、この3年間で振り返れば、教員ひとりひとりが、学生がこの取り組みによって大きく成長する確かな手応えを感じたことも事実だと思います。

地域の発展に大学の貢献が求められるのと同様に、大学もまたすぐれた人材の育成に地域の協力を必要としています。本取り組みにご尽力くださったすべての関係者のみなさまと共にこのことを再確認しつつ、この3年間の取り組みを、次年度以降に開設する「健康支援地域連携センター」での活動に継承・発展させていきたいと思っています。

本報告書が、看護学教育の改善に努力しておられる多くの方のみなさまの参考になれば幸いです。

神戸市看護大学 副学長 林 千冬